

天文二年（一五三三）三月一二日付の文書がある。

就鶴岡勸進之儀
少別当被参候間、

以一書令啓候、

定而別当可被申候、

恐々謹言、

三月十二日

左京大夫氏綱（花押）

謹上里見大郎殿御留所

鶴岡八幡宮再建にあたり、北条氏綱から普請を要請するものである。この手の書状は、これまでも多々送られてきた。鶴岡八幡宮を焼いた張本人である里見義豊に、権限のない筈の北条氏綱が求めてくる。

不可解な書簡であった。

少なくともその権者たる古河公方は、そういう細々としたことを北条氏に代行させていることが垣間見える。いや、代行という名の、権威剥奪というべきか。

当然、北条氏と対峙する関係の武将は、これに誰一人応じていなかった。応じるのは、事実上、北条氏に併呑された豪族ばかりで、結果として再建の木材は不足した。氏綱としては、臆面もない書簡を再三再四放ち、それが世上を駆け巡っている。

里見義豊はこの要請に応じていない。外交のすべてを里見実堯へ一任しながらも、そのことだけは譲ろうとしなかった。鎌倉を焼いた事実を認めたくない一心から、それに背を向けていただけというのが真相だ。

結果的に、義豊は立場を貫くことが出来た。

この年の七月二五日。

里見義豊は傅役の中里源左衛門・本間八右衛門を稲村城に呼び

「手筈は？」

と、小声で糾した。

「されば、正木大膳に招集を」

正木通綱が入城したら、是非を見届けるまでもなく宮本城の実堯を呼び寄せる。場合によっては二人を討ち、長狭郡と久留里に兵が向かう。その算段は、すっかり機が熟していた。

「それでよい」

義豊は頷いた。

里見実堯と正木通綱を討つことは、義豊にとつて、真の独立となる。これらを廃すことで、奉行衆も力を削がれるだろう。

小弓公方へはいつ使者を送るか、本間八右衛門が問いかけた。

「事を仕損じたら面目が立たぬ。首尾よく片付いたら、内乱平定これありと、そなたが使者を務めよ」

「は」

宮本城の里見実堯は、自らの終焉を知ることなく、関東の情勢や北条との駆引き、そして里見の辿るべき道筋を深く考えていた。

たとえ実権は奪われようとも、まことに里見の末を思うなら〈一統〉より為すべきことがある。

そのために、うるさい小舅を貫くまで、それこそ亡き義通に対する義理のだと、実堯は信じていた。

在地豪族を手懐ける実堯の信奉者は多い。

義豊が急ぐよりも、むしろ実堯のそれこそ、〈一統〉への一步と思えなくもない。その根底には、先々代の里見義実から連綿とつづく里見氏の善政と厚情による、確かな治世があった。

その匂いを受け継ぐ者として、人々は実堯に惹かれた。その実堯が義豊を立てたからこそ、里見家はまとまっていたのである。

その楔が外れたとき、安房はどうなってしまうのか……その刻が、静かに訪れようとしていた。

天文二年（一五三三）七月二七日。

正木大膳亮通綱は、上野筑後守を伴い稲村城の土を踏んでいた。

「では、宮本城へ」

そう云つて使いを呼ぶ中里源左衛門を横目にしながら、里見太郎義豊は溜息を吐いていた。

「こんなものか」

ふと呟く、その言葉には意味がない。なんとなく、口にただけのものである。

義豊のいる広間の隣には、御傍衆とその家人たちが襖を隔てて控えている。

一匹の蟻を複数の蜂で刺すような、そんな残酷な支度が、すっかり整っていた。

十
十
十

犬掛へ(1)

夢酔 藤山